

## 学生セミナー開催報告書

新田龍希

周 俊宇

【セミナー名称】 東京大学総合文化研究科・政治大学台湾史研究所 台湾史研究生交流論壇  
「台湾史研究的新思維・新挑戦——構想・史料・論点」

【日時】 2014年1月22日（水）9時30分～18時5分

【場所】 東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1

【主催】 東京大学大学院総合文化研究科／国立政治大学台湾史研究所

【使用言語】 中国語

【プログラム】 5頁以下参照

このたび、「卓越した大学院拠点形成支援補助金経費」を利用し、台湾・国立政治大学台湾史研究所より博士課程の学生6名および引率者として薛化元教授兼所長、林果顯助理教授を招聘し、2014年1月22日に東京大学総合文化研究科及び台湾・国立政治大学台湾史研究所主催で若手台湾史研究者交流シンポジウム「台湾史研究的新思維・新挑戦——構想・史料・論点」（以下、本シンポジウムと略）を開催した。事前申込制をとったにも関わらず、参加者は計37名と大変活況であった。また本シンポジウムに併せて、同日東京大学大学院総合文化研究科と政治大学台湾史研究所間の交流協定の更新式典が執り行われた。

シンポジウムは二部構成で、第一部（第1～3セッション）を研究構想報告、第二部（第4・5セッション）を博士論文及び修士論文の報告とした。本シンポジウムは日台学生間の交流を促進することを主目的とし、なるべく自由に議論ができるよう心がけた。各セッションの概要は以下の通りである。

### 第1セッション

第1セッションは早丸一真（東京大学総合文化研究科博士課程）が司会を担当し、林逸帆（政治大学台湾史研究所博士課程）、蘇峯楠（同左）、蔡思薇（同左）が報告を行った。

林報告は17世紀前半のオランダ東インド会社による東アジア貿易、特に毛織物に着目したものである。林は同じ物品にもかかわらず、各国の史料において名称（訳語）が異なるという現象が研究に多大な不便をもたらしているという問題意識から出発し、史料上の用語の考証を通じて、オランダ史料に記載した「Laken」なるものが、日本語史料の「ラシャ」、及び中国語史料の「哆囉嗶」と同一の物品であると結論づけた。質疑応答では今後の研究

の方向性等について質問が出た。

蘇報告は1895年に日本で出版された台湾関係地図を解説したものである。1895年前後に日本の民間で出版された地図は精確さに欠き研究価値がないという従来の認識に対し、逆に不精確であるからこそ研究価値があるのではないか、という論点を提示した。そしてこれらの地図の地形、界線、景観、空間などの表現方法を解説することにより、清朝の版図から帝国日本の領地への「領土化」、欧米から東アジアに至る知識と情報の流通、官と民での視線の差異性／共通性という三つの側面が反映されていると論じた。質疑応答では、地図を歴史史料とする際の有効性を中心に議論され、英語圏における歴史地理学の研究が方法論上参考にできるのではとコメントが出た。

蔡報告は1905年に台湾総督府殖産局川上龍弥が実施した「有用植物調査」計画を論じたものであり、従来看過されてきた川上に対し、台湾植物学史上の地位や役割について新たな評価を提示した。報告に対し、研究の意義や対話可能な研究分野について質問が出された。

## 第2セッション

第2セッションは金賢貞（東京大学総合文化研究科博士課程）が司会を担当し、鄭螢憶（政治大学台湾史研究所博士課程）と新田龍希（東京大学総合文化研究科博士課程）が報告を行った。

鄭報告はこれまで日本帝国、国民政府の統治上の必要性から論じられてきた阿里山通事呉鳳に関する研究に対し、呉鳳が信仰されるに至った過程やその現地化、「蕃地」との関係に着目して論じたものである。報告は、族譜、契約文書、碑刻などの民間文献に加え、『台湾総督府公文類纂』等の史料を利用して、呉鳳信仰と地域社会の発展との関係、及び漢蕃関係における通事の役割を整理した。報告に対し、「生番」と「化番」の区別に関する問題や食糧納付の義務について、また番界の土地開墾権の合法化過程について質問がでた。

新田報告は、日本統治初期の土地調査及び土地政策を主題とするものである。従来の研究においては土地調査の意義として①地租増収、②土地所有権明確化という二点が強調されてきたが、それ以外にも③土地調査により総督府が大量の国有地を獲得したこと、そして④土地調査により初めて全面的に地方社会の状況や民情を調査した点が重要であると指摘した。このような多義的な土地調査及び土地政策を通して総督府の支配が中央から末端へと浸透し、また台湾人紳商との関係を形成し、台湾人有力者間の地位が再編されたという経緯が示された。報告に対し、内地における地租改正との関係や劉銘伝による土地改革との関係などの質問が出た。

### 第3セッション

第3セッションは、曾齡儀（ニューヨーク市立大学博士課程、現在：交流協会研究フェロー〔川島真准教授受け入れ〕）が司会を務め、周俊宇（東京大学総合文化研究科博士課程）と大萱晃子（同研究科修士課程）が報告を行った。

周報告は日本帝国統治期における日本人の台湾人に対する認識の形成と変容に関するものである。報告では日本人と台湾人をそれぞれ主体と客体とし、近代台湾人アイデンティティの萌芽及び植民地帝国の枠組における台湾人の位置付けを考察した。質疑応答では、台湾人の日本人認識という視点も有意義であるとのコメントがでた。

大萱報告は雷震の日本留学時代の思想に関するものであった。報告では、国民党の高級官僚であって革命家でも思想家でもなかった雷震が1960年に台湾本省人と共に党を立ち上げようとした原動力は何だったのかという問題関心から、その手がかりとして雷震の日本留学時代の思想形成、特に憲法観が考察された。報告に対し、雷震研究の第一人者である薛化元先生よりコメントと情報提供があった。

### 第4セッション

第4セッションでは、曾立維（政治大学歴史学研究所博士候補生、東京大学総合文化研究科特別聴講生）が司会を務め、陳世芳（政治大学台湾史研究所博士課程）、陳芷盈（同左、東京大学総合文化研究科特別聴講生）が報告を行った。

陳世芳報告は明治期から昭和期にかけて南洋地域において日本の最重要南進拠点であったフィリピンを研究対象とし、日本の南進政策のもとの台湾総督府の南洋政策の形成過程を考察した。報告に対し、戦後の台湾とフィリピンの関係、台湾総督府と南洋庁との関係など、今後進展可能な研究テーマに対するコメントがあった。

陳芷盈報告は日本統治時期台湾社会の姦通行為と姦通罪との関係を検討したものである。まず清律と日本刑法の条例内容を照合することで、刑法における姦通罪より伝統的な姦通のほうがその範囲が広いことを示し、これを手がかりとして台湾における姦通罪の実態を論じた。報告に対しては、刑法の中で姦通罪に着目した理由などの質問が、また姦通行為と姦通罪の関係があまり論じられていないなどの指摘が出た。

### 第5セッション

最後のセッションは田上智宜（東京大学総合文化研究科博士課程）が司会を務め、黄仁姿（政治大学台湾史研究所博士課程）、許珩（東京大学総合文化研究科博士課程）、若松大祐（日本学術振興会特別研究員PD）が報告を行った。

黄報告は1945年から1950年代までの台湾農政の再構築過程を扱ったものである。特に

①日本統治時代の農政との連続性、②中国大陸の制度との整合性、③アメリカの影響という 3 点に着目し、近年公開された農会檔案（国家檔案局蔵）を利用して農会の再編過程を検討した。報告に対し、Y字型歴史観に対する批判の妥当性、及び歴史の連続性の議論と派閥闘争という二つの関心の柱をどのように扱うかなどの質問が出た。

許報告は 1960 年代の日華関係を、経済関係に着目して検討したものである。報告では日本と台湾の外交・経済檔案を利用し、日華関係危機と円借款の関係に焦点をあて、経済関係の視角から従来の吉田書簡を中心とする 1960 年代の日華関係の見方に再考を促した。質疑応答では、当時台湾内部で日本資本の台湾進出についての分岐点があるかどうか、借款問題の独立性や他の問題との関連性、借款以外の技術協力の問題などを中心に議論された。

若松報告は現代台湾史において蔣経国が蒋介石から権力を継承する過程で出現した官製歴史叙述の内容を、解明しようとするものである。1970 年代における官製歴史叙述は、基本的には中国統治の正当性を主張するとともに、台湾統治の正当性を暗に着実に主張するものであった。こうした「我々の歴史」を背景に持つ民主憲政は、いわゆる選挙民主主義ではなく、台湾での国家建設全般を意味しており、かなり変則的であるものの、住民の広範な参政が実現されていたとも考えられると結論づけた。質疑応答では、言説（宣伝）、歴史的事実、報告者の解釈の違いについて質問が出た。

総合討論では、台湾の台湾史研究と日本の台湾史研究の違いについて、また日台の台湾史研究の現状、そして台湾史を研究する意味などにつき、日台双方の参加者より活発に意見交換がなされた。

総じて今回のシンポジウムでは同世代の若手研究者の研究内容を知ることができ、また台湾史研究の現状と課題についても活発に議論ができ、意見を共有できたことが大きな収穫であった。

末筆ながら、このような貴重な機会を与えていただいた「卓越した大学院拠点形成支援補助金」関係者の皆様に心より謝意を表したい。

## 追記

今回の「卓越した大学院拠点形成支援補助金」では、予算申請に際して資料印刷費が費目に含まれていなかったが、セミナー開催にあたっては印刷費予算があるほうがありがたいと考える。今回は参加者が多く、報告資料の分量が多かったことから PDF データを事前配布したが、やはり紙媒体を配布する方が議論もしやすいように思う。次年度以降の参考にさせていただければ幸いである。

## 議程

時間	議程		
9:00-9:30	報到		
9:30-9:45	開幕式／參加人員介紹 薛化元（政治大學）、川島真（東京大學）		
研究構想與史料（一）			
9:45-11:15 第一場	主持人	發表人	題目
	早丸一真（東京大學）	林逸帆（政治大學）	17 世紀前期 VOC 東亞貿易下的毛織品
		蘇峯楠（政治大學）	1895 年日本出版臺灣地圖的空間意識
		蔡思薇（政治大學）	「臺灣有用植物調查」初探
11:15-11:25	休息		
研究構想與史料（二）			
11:25-12:25 第二場	主持人	發表人	題目
	金賢貞（東京大學）	鄭瑩憶（政治大學）	在鬼、神之間：清代吳鳳信仰的形成與轉變
		新田龍希（東京大學）	日治初期台灣總督府之土地調查與土地政策
12:25-12:45	休息（午餐）		
研究構想與史料（三）			
12:45-13:45 第三場	主持人	發表人	題目
	曾齡儀（ニユーヨーク大／東京大學）	周俊宇（東京大學）	日本帝國統治下台灣人認識的形成與變貌
		大萱晃子（東京大學）	試探雷震的思想背景：以留日時期為中心
13:45-13:55	休息		
博碩士論文（一）			
13:55-15:15 第四場	主持人	發表人	題目
	曾立維（東京大學／政治大學）	陳世芳（政治大學）	臺灣總督府「南支南洋」政策之制定與應用：以鄰邦菲律賓為中心(1895-1925)
		陳芷盈（東京大學／政治大學）	日治時期通姦罪與臺灣社會的通姦行為之關係

15:15-15:25	休息		
15:25-17:25 第五場	博碩士論文(二)		
	主持人	發表人	題目
	田上智宜(東京大學)	黃仁姿(政治大學)	戰後台灣農政的再建構:農會與合作社分合案的派系紛爭
		許珩(東京大學)	1960年代日華關係的管理機制:以日華關係危機為中心
若松大祐(日本學術振興會)		「風雨中的寧靜」時代如何撰寫歷史:現代台灣史上民主理念的一個內涵	
17:25-17:55	綜合討論 林果顯(政治大學)、家永真幸(東京醫科牙科大學)		
17:55-18:05	閉幕式 薛化元(政治大學)、村田雄二郎(東京大學)		
18:10-20:00 懇親會	東京大學大學院總合文化研究科和政治大學台灣史研究所之交流協定更新儀式 主持人:村田雄二郎・川島真(東京大學) 簽署人:石井洋二郎(東京大學大學院總合文化研究科研究科長)、薛化元(政治大學台灣史研究所所長)		
	聚餐會		